

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370234

研究課題名(和文) テキストに探る『太平記』の成立と作者

研究課題名(英文) The Construction and Author of the Taiheiki via the Text

研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO, Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来、『太平記』の作者像は外部徴証に頼って考察されることが多かった。本研究ではそうした手法には距離を置き、なるべく作品内部に手がかりを求めることにより、『太平記』作者の政治に対する姿勢、知的基盤を明らかにすることに努めた。

また、こうした研究に基盤を成り立たせるためには、古態本の考察が不可欠である。本研究では従来、古態性を強くとどめるとされた神田本をとりあげ、その古態性を検証し、神田本が必ずしもすべて古態をとどめるわけではないことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：The conventional way of studying Taiheiki's author has been via signs and evidence external to the text. Here I distance myself from that method and work to clarify the political stance and knowledge base of Taiheiki's author through clues within the text.

Kotaibon (old form variants) are indispensable for the feasibility of this methodology. Accordingly, I examine the Kandabon variant, which is thought to retain a large degree of characteristics belonging to kotaibon variants. I conclude that the Kandabon does not necessarily retain all of those characteristics.

研究分野：日本中世文学

キーワード：太平記

1. 研究開始当初の背景

『太平記』の成立論は、今川了俊の『難太平記』と『洞院公定日記』の記述に依拠することを常とする。これによれば、『太平記』の成立には足利政権と密接な恵鎮・玄恵などの律僧・学僧が関与し、彼らとその庇護者足利直義の死後は、それより身分の劣る小嶋法師のごときが加筆に参加しているという理解が成り立つ。これまでの『太平記』研究は作者論・成立論のみならず、作品の構想・思想・表現をめぐる各考察もこうした理解を前提に進められてきた。

2. 研究の目的

本研究は、これまで相応の研究を重ねられながらいまだ不分明な点の多い『太平記』の成立と作者の問題を、本文の注釈的研究を通じて内部徴証を積みあげ、解明してゆくことを目的とする。上記のように、これまでの『太平記』の成立論は、『難太平記』や『洞院公定日記』の記述に依拠して進められてきた。だが、わずかな外部徴証にもとづく成立論には限界がある。そこで本研究ではテキストを精読し、注釈的な考察を通して、成立時期、作者圏、作者の文学的環境、作者の政治的立場等の解明につながる記述、詞章、表現を探りだす。そのうえで、『太平記』がどのような人物によって、どのような経過を経て、何を主張するためにまとめられた作品なのか、考察を深めてゆく。

3. 研究の方法

本研究はテキスト中、成立の痕跡のうかがえる記事・表現・語句を注釈的方法によって考察し、『太平記』の成立と作者像にかかわる情報を集積してゆくことを目指している。テキストを基盤に成立時期や作者を直接考証するとともに、作者の読書環境、歌壇・文壇とのかかわり、作者の政治的立場など、考察する視点をより広く取りたい。具体的には以下の点に着目して研究を進める。

(1) 成立時期の考証

作品内の固有名詞、官途、年時表記等、成立過程を反映しうる表記・語句を集中的に考証する。この作業を通じて、「原太平記」の成立と『太平記』の最終的な成立の過程を考察する。

(2) 歴史上の事件展開との対照

『太平記』に描かれた諸事件を史料によって裏づけてゆく。この作業を通じて、作中に描かれた出来事と作者の距離を明らかにし、作者圏を検討する。また、この作業を通じて、作者の政治的立場や思想・主張の考察も進める。

(3) 中国故事、漢詩

『太平記』中の中国故事・漢詩の典拠を明らかにすることにより、作者の文学的環境を

考察する。特に、これまで不明とされてきた宋代・元代の故事・漢詩の出典解明を中心に据える。また、禅籍を視野に収め、『太平記』の成立と禅林の関係を考察する。

(4) 和歌および和歌的表現

『太平記』に収められた和歌および和歌的表現の出典研究を進めることにより、『太平記』作者と南北朝歌壇の関連を考察する。また、『太平記』巻40に引用される二条良基『雲井の花』のごとき資料にも注目し、和歌的文献と作者との関係も明らかにする。

(5) 異本の本文

近年、古態本文の再検討が進んできた。巻によっては、従来古態本と認識されてきた甲類本(神田本・神宮徴古館本・西源院本等)ではなく、乙類本(吉川家本、米沢本、前田家本等)に古態の本文が残存していることが明らかになった(小秋元段「『太平記』の古態をめぐる一考察 卷三十八を中心に」、『中世文学』53、2008年)。したがって、異本の本文からは成立を裏づける様々な情報や、作者の政治的立場を読みとりうる詞章が多く存在するといえる。諸本の異文を調査し、その点の究明を行う。

以上の研究を通して、『難太平記』や『洞院公定日記』からはうかがえない、『太平記』の成立に関する情報を集積し、今後の作者論、作品論への寄与を行ってゆきたいと考える。

4. 研究成果

本研究を通じて明らかにしたことは以下の通りである。以下、年度ごとに研究代表者・研究分担者の成果を記す。

(1) 2013年度

『太平記』の本文と表現の側面から、古態本文の復元とそこに見られる表現意図についての考察を総合的に行った。本年度は『太平記』本文の和歌・漢籍的表現から見る作者の志向・意図、作品の傾向を探る研究と、従来最古態を留める一本と認識されている神田本の検討を行った。

北村昌幸は、『太平記』における和歌の出典調査を行い、勅撰和歌集においては一定の傾向が認められることを発見し、そこから作者の志向、作品の特色に考察を及ぼした。また、森田貴之は、『太平記』に引用される漢籍的表現の機能についての検討を行った。その結果、『太平記』では漢籍由来の一つの表現が、異なる価値観のもとで多様に引用される傾向があり、そこに『太平記』の表現の特色を見いだす論を発表した。

一方、小秋元段は、「雲景未来記事」を中心とした諸本の異同を精査し、これを巻末にもつ神田本の形態が、これを巻の半ばに配置する諸本の形態より後出のものであることを指摘した。長坂成行と和田琢磨は、神田本

の書誌・本文にかかわる基礎的事項の再検討を行った。長坂は、神田本の書誌的な側面についての検討を行い、神田本に現れる独特の記号類の意味を探った。和田は、神田本巻二の本文を対象に、これまで未検討であった仁和寺本との比較検討を行った。

(2)2014 年度

『太平記』本文を詳細に分析することにより、その作者像を明らかにするとともに、古態本の本文を批判的に検証することにより、古態本文の再考察を進めた。

長坂成行は『太平記』に登場する人物のうち、中流貴族の侍層に注目することにより、作者が歴史的事実を知悉しており、そうした知の基盤のなかで歴史叙述を行っていることを解明した。北村昌幸は『太平記』における南朝の叙述を追究し、作者の南朝に対する意識の分析を行った。従来の研究では南朝に関する記述はあまり注目されることがなかったため、作者の南朝に対する知識と意識を探ることは、作者の立場や作品の性格を知るうえで意義があると思われる。森田貴之は『太平記』における弘法大師関係説話の分析を行った。作者が依拠した資料と『太平記』に引用された説話を比較検討することにより、説話がどのような意識のもと編纂されたかを考察した。

一方、和田琢磨が神田本巻三十二をとりあげ、本文書写のあり方を考察した。巻三十二は永和本系本文と玄玖本系本文を混合するかたちで書写した巻であり、書写者がどのような方法でこの巻を形成していったのかを考察した。小秋元段は神田本巻十六をとりあげ、その本文が一応、諸本中最も古い本文を有しているながらも、一方では独自の節略を行っていることも指摘し、独自の節略の行われる前の段階に、最古態を想定しようという論を発表した。

(3)2015 年度

これまでの研究を継続し、『太平記』の成立と作者をめぐり、作品を通じての作者像の問題の読み解きと古態本系諸本の考察を行った。

北村昌幸は『太平記』と有力守護大名の一つ山名氏との関係を、和田琢磨は同じく有力守護大名の一つ今川氏との関係を、本文叙述や他資料との比較から考察した。森田貴之は『太平記』における合戦記事の考察を行った。これらの作業により、『太平記』と有力守護大名との関係や、『太平記』の独自の文芸性を明らかにすることができた。

一方、小秋元段は神田本『太平記』の表記（漢字片仮名平仮名混用）の特徴を調査し、これまで古態性の強い伝本として重視されてきた神田本の表記の内実を明らかにした。また、長坂成行は、その存在は知られながらも、詳細な報告のなされてこなかった北畠文庫本の書誌、本文の研究を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

小秋元段、神田本『太平記』本文考 巻十六を中心に、『『太平記』をとらえる 第二巻』、査読無、151-173 頁、笠間書院、2015 年

長坂成行、高師泰の枝橋山荘造営をめぐる脇役の周縁 『太平記』注解補考(三)、『『太平記』をとらえる 第二巻』、査読無、115-137 頁、笠間書院、2015 年

北村昌幸、『太平記』における諸卿僉議南朝の意思決定をめぐる諸問題、『『太平記』をとらえる 第二巻』、査読無、93-113 頁、笠間書院、2015 年

和田琢磨、室町時代における本文改訂の一方 神田本『太平記』巻三十二を中心に、『『太平記』をとらえる 第二巻』、査読無、175-199 頁、笠間書院、2015 年

森田貴之、『太平記』と弘法大師説話 引用説話の射程、『『太平記』をとらえる 第二巻』、査読無、37-71 頁、笠間書院、2015 年

小秋元段、『太平記』巻二十七「雲景未来記事」の編入過程について、『『太平記』をとらえる 第一巻』、査読無、119-141 頁、笠間書院、2014 年

長坂成行、神田本『太平記』に関する基礎的問題、『『太平記』をとらえる 第一巻』、査読無、151-184 頁、笠間書院、2014 年

北村昌幸、『太平記』の引歌表現とその出典、『『太平記』をとらえる 第一巻』、査読無、13-49 頁、笠間書院、2014 年

和田琢磨、神田本『太平記』本文考序説、『『太平記』をとらえる 第一巻』、査読無、187-209 頁、笠間書院、2014 年

森田貴之、『太平記』テクストの両義性、『『太平記』をとらえる 第一巻』、査読無、51-83 頁、笠間書院、2014 年

〔学会発表〕(計15件)

小秋元段、神田本『太平記』の表記法 片仮名・平仮名混用と濁点使用を中心に、2015 年度『太平記』研究国際集会、2015 年 8 月 23 日、法政大学大学院(東京都新宿区)

長坂成行、北畠文庫本『太平記』に関する報告、2015 年度『太平記』研究国際集会、

2015年8月23日、法政大学大学院（東京都新宿区）

北村昌幸、『太平記』と山名氏、2015年度『太平記』研究国際集会、2015年8月23日、法政大学大学院（東京都新宿区）

和田琢磨、『太平記』と今川氏、2015年度軍記・語り物研究会大会、2015年8月24日、東洋大学（東京都文京区）

森田貴之、『太平記』合戦譚の方法、2015年度『太平記』研究国際集会、2015年8月23日、法政大学大学院（東京都新宿区）

小秋元段、神田本『太平記』本文考 卷十六を中心に、2014年度『太平記』研究国際集会、2014年8月20日、法政大学大学院（東京都新宿区）

長坂成行、『太平記』の高師直説話・雑考、2014年度『太平記』研究国際集会、2014年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

北村昌幸、『太平記』の南朝関連記事について、2014年度『太平記』研究国際集会、2014年8月20日、法政大学大学院（東京都新宿区）

和田琢磨、神田本『太平記』の本文をめぐる一考察、2014年度『太平記』研究国際集会、2014年8月20日、法政大学大学院（東京都新宿区）

森田貴之、『太平記』と弘法大師説話、2014年度『太平記』研究国際集会、2014年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

小秋元段、『太平記』卷二十七「雲慶未来記の事」の編入過程について、2013年度『太平記』研究国際集会、2013年8月18日、法政大学大学院（東京都新宿区）

長坂成行、神田本『太平記』に関する基礎的問題、2013年度『太平記』研究国際集会、2013年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

北村昌幸、『太平記』と勅撰集、2013年度『太平記』研究国際集会、2013年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

和田琢磨、神田本『太平記』本文考序説 卷二を中心に、2013年度『太平記』研究国際集会、2013年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

森田貴之、『太平記』の忠臣論の再検討、2013年度『太平記』研究国際集会、2013年8月19日、法政大学大学院（東京都新宿区）

〔図書〕(計2件)

小秋元段、他、笠間書院、『『太平記』をとらえる 第二巻』、2015年、226頁

小秋元段、他、笠間書院、『『太平記』をとらえる 第一巻』、2014年、234頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO Dan)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

(2) 研究分担者

長坂 成行 (NAGASAKA Shigeyuki)

奈良大学・名誉教授

研究者番号：90131606

北村 昌幸 (KITAMURA Masayuki)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：20411770

和田琢磨 (WADA Takuma)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：40366993

森田 貴之 (MORITA Takayuki)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：90611591